

2017.5

(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やま
富 薬

5号

第39巻
No.334



トクサ *Equisetum hyemale* L. (トクサ科 *Equisetaceae*)

生薬 トクサ(木賊) 4月頃か8~10月に地上部を刈取り、陽乾する。

成分 SiO₂、palustrine、dimethyl sulfone、thymine、ferulic acid等。

効能 漢方では眼科の治療薬として、結膜炎、角膜混濁、流涙症に応用する。民間では収斂止血薬として痔出血、腸出血、月経過多、下痢に服用する。また、利尿剤としても用いる。

生薬 トクサ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



シダ類であるトクサの仲間は約3億年前の古生代石炭紀に栄え、石炭の元になった化石植物群で、現在はほとんどが絶滅し、生き残っているのはトクサ科、トクサ属の一科一属だけです。属学名の *Equisetum* は equus(馬) と seta(剛毛)の合成語で、ミズトクサ (*E.limosum*) の水中にある茎から生える黒い根が馬の毛に似ていることからギリシアのディオスコリデス(40頃-90)が名づけたと言われています。トクサは朝鮮半島、中国、千島、サハリン、シベリア、ヨーロッパ、北アメリカなど北半球に広く分布し、日本では本州中部以北から北海道に生息します。沢沿いの林下や林縁を好み、地中に地下茎を長く横走し、節々から常緑で暗緑色の地上茎を直立、高さ1m、直径は5~7mmで分枝しません。中空で節があり、引っ張ると節で抜けます。節の部分にギザギザのはかま状の葉鞘を形成します。茎の先端にはツクシの頭部のような孢子葉群を付けます。茎の表皮細胞にはプラント・オパールと呼ばれる珪酸を蓄積し、茎を強化する性質があります。茎を煮て乾燥させ、紙やすりのように木工品の磨き仕上げに使うところから、李時珍(1518-1593)は「この草は節があつて表面が糙澀(粗く滑りが悪い)である。木骨の細工に用い、木を磋(みがき)、擦れば、粗い理が取れて滑になる。それで木の賊というわけだ」と中国名の木賊の語源を語っています。和名のトクサは『和漢三才図会』(1713)に「物を磋こと砥の如し、故に砥草と称す」とあり砥(平らにする)草の意で櫛や漆器など木工品を磨いたことから付けられた名前です。また、江戸時代から園芸的価値も高く、『花譜』(1694)に「花の色みどりにして、目をよるこぼしめ、観賞すべし。やはらかにして細なる地にうえ、水をしばしばそそぐべし。正月に舊茎をみなきるべし。新茎生じてうるわし」と記され、日本庭園に植栽されるようになりました。中には茎が黄色になるものや黄色の縦縞が入るもの、黄色の虎斑が入るものが栽培されています。

中国で最初に木賊の名が記されているのは『嘉祐本草』(1057-1061)で「木賊は、秦、隴、華、成諸郡の水に近い土地に出る。苗は長さ一尺ばかり、叢生するものだ。每根一幹で、花も葉もなく、一寸位づつに節があつて色は青い。冬を凌いで凋まない。四月に採取する」、「目疾に用いて翳膜を退け、積塊を消し、肝、膽を益し、腸風を療じ、痢を止め、また婦人の月水の断えぬもの、崩中赤白を止める」と記されています。

国内では『和名抄』(931-937)にその名が見られ、「木賊、度久散」と、『多識編』(1612)にも「木賊、登久左」と記されています。『農業全書』(1696)には「園に作る薬種」として「木賊を薬に用ゆ。細工につかう時はとくさと云う。庭にうえてもめづらし。正月に古茎を悉く切り取るべし。新茎生じて美なり」と、薬効についての記載はありませんが薬草であることは伺えます。前出の『和漢三才図会』には初めて薬効が記載されていますが『本草綱目』(1590)をそのまま写したものです。『和蘭薬鏡』

(1820)になって初めて詳しく説明され「此の薬往古多く用うれども、晩近久しく廃せり。然るに近時勿能(ウェーネン獨乙都の都府)の大学師連忽蹟(レンホツセキ人名)、是を質験して利尿の峻薬とし、和蘭の医家、是に従いて試用し、逾世に唱明せり」と、古くは用いたが最近ではあまり用いなくなっていたところ、ドイツでは利尿薬としてよく用いることから日本でも用いられるようになったことが記されています。しかし現在ではあまり用いなくなっています。(村上守一 記)